
リジー・ボーデン、斧を取り

こぬか雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リジー・ボーデン、斧を取り

【Nコード】

N5605F

【作者名】

こぬか雨

【あらすじ】

リジー・ボーデンと呼ばれた女は、マザーグースの歌のように人を殺していく。その理由は、果たして……？連載『ガーディアン紅眼の守護者』とほんの少しリンクしています。

L i z z i e B o r d e n t o o k a n a x e ,

(リジー・ボーデン、斧を取り)

H i t h e r f a t h e r f o r t y w h a c k s .

(父親四十回ぶった斬る)

W h e n s h e s a w w h a t s h e h a d d o n e ,

(自分のしたことを目の当たりにして)

S h e h i t h e r m o t h e r f o r t y - o n e .

(母親四十一回ぶった斬る)

あたしはリジー・ボーデン。もちろん偽名だ。でも歌の通りに父さんと母さんを殺した。隣の家だね。あたしには父さんも母さんもいないのさ。所謂コインロッカー・ベイビーってやつ。実際は教会前ベイビーだけだね。

孤児院では割と幸せ……だったらこんなことしないさ。あたしは今沢山の父さんと母さんを殺してるんだ。捕まらないのかって？ 捕まらないよ。ロンドン警察なんて、ジャック・ザ・リッパーも捕まえらんなかったんだからさ。あたしがこれまで殺した父さんと母さんは……えーと、指が足りないや。そうそう、二十三人。隣の家のお父さんと母さんはかわいい一人娘のマリアちゃんを殴ってたから殺してやった。向かいのお父さんと母さんは、いつも喧嘩しててうるさいから殺っちゃった。

ロンドンに来てからはね、えーとね……そうそう。子供が他人に迷惑かけてんのに携帯いじってる馬鹿な母さんを殺した。それから、子供がいるのに不倫してる父さんとその愛人をぶった斬った。愛人には四十二回斧を振った。

さてさてリジー・ボーデン。今日の父さんと母さんはいい人かな。

目をつけたのは優しそうな父さんと母さん。インテリさんかな。父さんは眼鏡をかけて新聞を読んでは。母さんはご飯を作ってる。美味しそうな匂いだ。これはあれかな。カレーライスってやつ。あたし大好きなんだよね。

匂いにつられたのか、子供が降りて来たよ。緑の目に黒い髪のかわいい男の子。うーん、母さんに似てるかな。母さん似の男の子はかつこよくなるらしいよ。

お、父さんが新聞を畳んだ。そうか。夕食だから一緒に食べるんだね。いい父さんと母さんだ。三人で食卓についてキリスト様に祈りを捧げてる。あーあたしのお腹まで鳴ってきたじゃないか。えーと、神様とコメ農家とジャガ芋農家と固形ルー作った会社とニンジン……は嫌いだからいいや、あと母さんに感謝感謝。美味しいカレーをありがとう。

男の子はすごい勢いで食べる。カレーが好きなのかな。でもそんな速く食べるとおデブさんになるよ。将来メタボとか悲惨だよ。あ、ニンジン残してる。あたしと一緒にだね。

あ、母さんが怒ってる。そうだよ、ニンジンにはカロテンが入ってるから目にいいんだよ。じゃあウサギさんは目がいいのかな。男の子は目をつぶって、鼻をつまんでニンジンを食べてる。かわいいなあ。あたしもやってみようかな。ニンジン食べれるようになるかも。

男の子はもうカレーライスを食べちゃった。流しに皿を持ってくなんて偉いな。でも父さんと母さんがまだ食べてるのに上に行くのかい？ それはダメだよ。親不孝だなあ。

ご飯を食べ終わった父さんが上がっていく。あたしは男の子の部屋に先回りして、父さんを待った。きつと、みんなでテレビを見ようよ、とか言いに来たんだ。今日はアニメが入る日だからね。

父さんがドアを開ける。男の子はびっくりしたように顔を上げた。うん、いくら父さんでもノックくらいしてほしいよね。せっかく勉強してたんだからさ。

父さんはいきなり男の子を叩いた。あたしはびっくりする。だつてすつごく優しそうな父さんなのに。昨日花瓶でも割ったのかな？父さんが何か言ってる。

「お前という奴は！」うんうん。

「私に恥をかかせる気か！」

男の子は涙を流す。最近の男は泣ける奴のほうかモテるらしいよ。関係ないか。

「この前の試験でお前は十番だったらしいな！ この私の息子が一番を取れないなんて！」

十番つてすごいじゃん。あたしなんていつつ後ろから一番、みたいな。

男の子は泣きながら謝る。

「ごめんなさい……次は一番取るから……」

「一度落ちたら落ちるしかないんだよ！ お前は負け犬になるんだ！」

じゃああたしは何だろう。ああそうだ。あたしはリジー・ボーデんだ。悪い父さんは殺さなきゃ。

父さん、さつき「私に恥をかかせる気か？」って聞いたよね。心配しなくていいよ。

——父さんはここで死ぬんだから。

斧を持って颯爽と、父さんの前に進み出る。

Lizzie Borden took an axe,

(リジー・ボーデン、斧を取り)

Hit her father forty whacks.

(父親四十回ぶった斬る)

はい、一回。首ちよん切れた。

二回。右腕バイバイ。

三回。左腕もさようなら。あ、切れなかった。じゃあもう一回。あ、男の子倒れちゃった。

気似せず五回。内蔵どろり。

六回、七回、八回――

母さん上がって来た。ああ仕方ない。

母さんに一回。脂肪が覗く。

四十回はあとでね。

父さんに戻って、九回、十回。

ああ、カレーライスが出て来ちゃった。十一回、十二回――

L i z z i e B o r d e n t o o k a n a x e ,

(リジー・ボーデン、斧を取り)

H i t h e r f a t h e r f o r t y w h a c k s .

(父親四十回ぶった斬る)

W h e n s h e s a w w h a t s h e h a d d o n e ,

(自分のしたことを目の当たりにして)

S h e h i t h e r m o t h e r f o r t y - o n e .

(母親四十一回ぶった斬る)――

歌いながら斧を振り下ろして、八十一回。

あたしはまだ気を失ってる男の子にバイバイをして家を出た。今日も悪い父さんと母さん。いい父さんと母さんはいるのかな。

斧の刃が欠けてきたかも。でも買い替えはマズいかな。足がついちやう。いい父さんと母さんを見つけるまで、あたしはつかまつちやいけないんだ。だからバレないように、治安の悪い裏通りに行く。ここではあたしがリジー・ボーデンでも、通報したりしないのさ。通報した奴がつかまつちやうから。だって殺し屋なんて、あたしより殺してるもん。

「——見つけたぞ、リジー・ボーデン。いいや、ジャネット＝アラゴン」

あたしを呼ぶ声がした。声がした方を見ると、そこには黒いコートを着て、黒い革の手袋を嵌めた、真つ黒な髪 of 少年が立っていた。十五歳くらいかな。目だけがまるで焰のように真つ赤で綺麗。あたしは少年に言った。

「君は？」

「俺は『死人花』。殺し屋だ」

「コードネームじゃなくて本名教えてよ。あたしの本名知ってるんだから教えなきゃ」

「——月峰朔」

日本人か。あの『暗黒の水曜日』でほとんどいなくなっただけだと思っただけに。あたしは朔に近付いた。

「日本人かあ……そうかそうか。うん、珍しいものを見たよ」

「俺は珍獣かなんかか？……ていうか、状況わかってる？」

わかってるよ。頸動脈に刀突き付けられて、その次に起こることってだいたい血がどばー、だよ。殺しにきたんでしょ、あたしを。

「誰の依頼？」

「お前に父親を殺された子供だ。父親は不倫してたみたいけど」

「そっかあ、家ではいい父さんだったのかな……」

「優しい父さんだったらいい。不倫してる時点で最低な気がするけど」

うん、朔とは気が合うかも。まあ、刀突き付けられてるんだけど、でも血がどばー、して死んじゃう前にやりたいことがあるんだよね。まあロンドン警察より朔の方がかわいから、交渉してみよう。

「あたしね、探してるものがあるんだよ。それが見つかるまで死ねないな」

「……探してるものを見つけたら殺してもいいのか？」

「苦しいのは嫌だよ。すばすばと首斬ってよ？」

「ああ。で……探してるものは何だ？ 俺も早く楽に仕事終わらせたいから教えてくれ」

うーん。このまんま力入れた方が早く終わると思うけど、お言葉に甘えて。

「あのね、あたしいい父さんと母さん探してるの」

「いい……って具体的には？」

「ご飯作ってくれて、優しくて、にこにこしてて、世間体より子供を大事にして、でもいけないことはいけないうって言ってくれて、マザーグースを覚えてくれる人。あたしね、ちゃんと歌えるのリジー・ボーデンだけなんだよね」

「——ごめん、リジー。俺はそういう人を一人知ってたけど、五年前に死んだ」

朔は悲しそうな顔をする。せつかく頸動脈に当てた刀も下ろしちやった。あーあ、チャンスだったのに。

「俺は七歳までの記憶がない。だから本当の親は知らないし、多分死んでる。だけど花雪はお前の言う『いい母さん』だった。よく砂糖と塩間違えたけど」

「じゃあ他のマザーグース知ってる？」

「日本の童謡もイギリスのマザーグースも知ってる」

五年前なら、まだ孤児院だ。あーあ。そんな理想の母さんがいたらたくさん殺さずに済んだのに。

「——役に立てなくて、ゴメン。これから探しに行く……？」

「いいよ、もう」

「え……」

「朔の母さんいい人だから、もういいんだ。ほら、依頼なんですよ？ 殺しなよ」

朔があまりにすまなそうな顔をするから、あたしみたいな女が情けをかけてやりたくなっちゃうんだ。本当は朔の母さんに会いたいのだけだね。うーん。あたしは地獄行きだから、会えないかな。

「——リジー……いや、ジャネット」

「なあに？」

真っ赤な瞳から涙が流れた。綺麗。すごく透明で、月に照らされて輝いて。

「——こういう形では、会いたくなかった」

うん、あたしも。あーあ。隣に朔が住んでたらよかったのにな。

「俺はお前よりたくさん人を殺してる。だから、地獄でまた会おう」
刀を抜く。朔の涙と同じくらい綺麗な刃。手入れがきちんとされているのだろう。これなら多分、一瞬で胴体とさようならだ。

「——さようなら、ジャネット」アラゴン」

ああ、この綺麗な紅は血？ それとも君の——

朔はジャネットの死体を邪魔にならないところに横たえた。そして胸の上で手を組ませ、それに彼岸花と血で書いたカードを握らせる。

リジー・ボーデン、斧を取り

父親四十回ぶった斬る

自分のしたことを目の当たりにして

母親四十一回ぶった斬る

リジー・ボーデン、最期には

赤眼の鬼に一回斬られ

微笑みながら、逝ったとさ

（後書き）

朔「ぶっ飛んでるな……何で三人称にしなかったんだ？」

リジー「作者のテンションの問題よ」

朔「稚拙極まりないんだよ、お前の思考……何だよ、『血がどばー』って」

リジー「だってあたしまだ二十歳だもん」

朔「俺は本編でもまだ十八歳だが」

リジー「まあまあ」

朔「三人称なら書けることまだあったのにさ。孤児院で虐待されてたとかさ」

リジー「何で知ってるの？」

朔「……本編見ればわかるよ」

リジー「本編の頃にはあたし死んでるし！」

朔「地獄にもパソコンあるだろ」

リジー「いや、ないよ……多分」

朔「後書きでシリアスを台無しにした気がするな」

リジー「そもそもあたしの思考が作品を軽くしてるからいいんじゃない？」

朔「いや、よくないだろ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5605f/>

リジー・ボーデン、斧を取り

2010年10月8日15時19分発行